〔書の美展によせて〕

双柏文庫の足利尊氏文書
―書と政治と信仰と―

本展観では、双柏（そうはく）文庫に収められる鎌倉時代から戦国時代にいたる公家や武家の書が多数展示されます。双柏文庫は、旧制第三高等学校や京都女子大学などで教鞭を執った中村直勝博士（1890～1976）の蒐集にかかる古文書類で、一括して当館に収蔵されています。中村博士は古文書学や中世史、なかでも南北朝時代の研究で知られ、この時期の文書が同文庫の大きな柱になっています。今回の展観では、室町幕府初代将軍として著名な足利尊氏（1305～58）関係の四点の書（「足利尊氏自筆御神号」「足利尊氏寄進状」「足利尊氏御判御教書」「足利尊氏一切経発願文」）が展示されます。尊氏の文書をめぐっては、近年、小松茂美『足利尊氏文書の研究』（旺文社、1997年）、上島有『足利尊氏文書の総合的研究』（国書刊行会、2001年）という二部の大著が刊行されました。前者は古筆学、後者は古文書学という互いに異なる学問的基盤から尊氏の文書を検討したもので両者の見解には相違点も多いのですが、これらによりながら、四点の書と尊氏の生涯をたどってみたいと思います。

足利尊氏は嘉元３年（1305）に足利貞氏の子として出生、元弘元年（1331）の後醍醐天皇笠置挙兵に際しては、鎌倉方としてその鎮圧に向かいます。ところが、元弘３年（1333）、後醍醐が隠岐を脱出すると、鎌倉方としてこれを討伐に向かう途上、丹波国篠村八幡宮で源氏再興と北条氏討伐の旗を揚げ、後醍醐に味方して京の六波羅探題を滅ぼします。篠村八幡宮での挙兵は、尊氏の多岐にわたる信仰のなかでも中核を占める源氏の守護神としての八幡信仰によるものです。「足利尊氏自筆御神号」（図１）はこのことを如実に示しています。中世後期特有の目の粗い絹に擦り付けるように、朴訥な書体で「八幡大菩薩」の神号を記し、下部に巨大な花押を置きます。上部には孫の足利義満による「天山」の黒印が捺され、足利将軍家に秘蔵されたものと思われます。戦前、京都の古書肆でこの御神号を見出した中村博士は、「逆賊」尊氏の書として売り渋った店主を説得して入手した経緯を記しています。さらにこれがもともと旗指物であり、湊川の戦い（後述）の際に、尊氏自身の背に靡いていたものではないかと想像しています（『中村直勝博士蒐集古文書』、中村直勝博士古稀記念会、1960年）。

さて、建武政権樹立に大きな役割を果たした尊氏ですが、後醍醐天皇の親政路線や、新田義貞との確執などから袂を分かつことになります。鎌倉に下った尊氏は箱根竹ノ下の戦いで義貞を破り、建武３年（1336）正月に入京します。同月８日の日付を持つ「足利尊氏寄進状」（図２）は、「義貞已下之逆臣」を討つことを祈り、毎日の大般若経転読料として石清水八幡宮に播磨国福田保の地頭職を寄進するという内容で、ここにも尊氏の八幡信仰が濃厚に示されています。訥々とした楷書で記されたこの文書は、明らかに尊氏の自筆とはいえないのですが、前年３月１日付の「足利尊氏寄進状」（丹波安国寺文書）など数点の尊氏文書と同筆で、尊氏の右筆として著名な足利妙玄（みょうげん）の手になるものとわかります。妙玄は篠村八幡宮での挙兵の際、源氏再興の願文を執筆したことが『太平記』に見え、後には室町幕府評定衆にも名を連ねた人物です。

この寄進状の直後、尊氏は敗れて一旦九州に下り、態勢を立て直して再び東上、湊川の戦いで楠木正成らを撃破し建武３年７月に光明天皇を即位させ、『建武式目』を制定、二年後には征夷大将軍に任ぜられ室町幕府を開きます。尊氏は、弟直義とともに二頭体制を敷き、その協力を得ながら暦応元年（1338）には諸国に安国寺・利生塔を建て、翌年、吉野に崩じた後醍醐天皇の菩提のため天竜寺を創建するなど、篤い信仰を示します。

ところが、尊氏の執事・高師直と直義の不和などから政権に亀裂が生じます（観応の擾乱）。「足利尊氏御判御教書」（図３）は正平６年（1351）12月10日付で、観応の擾乱の最中に、駿河国手越河原の戦いにおける伊達藤三景宗の忠節と戦功を賞したものです。書きなれた流麗な書体は、花押も含めて尊氏自筆ではなく右筆書きと考えられます。

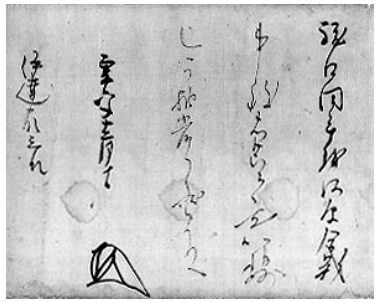
観応の擾乱の結果、直義は鎌倉に滅亡し、尊氏・義詮（第二代将軍）による幕府体制となります。文和３年（1354）、晩年の尊氏は一切経の書写という一大プロジェクトを企てます。京都・奈良だけでなく鎌倉の僧をも動員し、ほぼ一年をかけて書写は成り、等持院で供養が行われます。園城寺現蔵の592帖のほか、諸家に流出しており、「足利尊氏一切経発願文」（図４）もそのうちのひとつです。五行にわたる発願文には元弘の内乱以来の戦没者、後醍醐天皇や自らの両親の菩提、さらに天下泰平を祈願する内容、文和３年正月23日の日付および「征夷大将軍正二位源朝臣尊氏謹誌」との文字が版刻され、「尊氏」の署名のみが自筆となっています。この四年後、尊氏は波乱に満ちた五十四年の生涯を閉じることとなります。

以上のように、双柏文庫に収められた四点の尊氏文書は、武将としての側面と、信仰篤き為政者としての側面を示すいずれも重要な史料といえます。　（髙岸輝）

（図１）足利尊氏自筆御神号

（図２）足利尊氏寄進状

（図３）足利尊氏御判御教書



（図４）足利尊氏一切経発願文

季刊 美のたより No.149
平成17年１月５日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.